

博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	ベルランゲ・河野 紀子(ベルランゲ・コウノ ハリコ)
在住国名	フランス
所属・役職	国立リール第三大学日本学研究科長、教授
招聘回(招聘研究期間)	第11回(2016年9月1日～2016年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	幕末・明治初期の「人民の権利」概念形成における伝統的政法文化と西欧思想の相互影響過程 - 江藤新平を中心に
研究目的	幕末・明治初期における江藤新平の思想基盤を、一次史料を駆使して丁寧に整理することにより、従来の研究業績に比し、より一層実証性を重視する一方、彼の思想の全体像も浮かび上がらせたい。最終的には、仏語で江藤新平に関する書物をまとめることだが、単なる伝記に終わらせるのではなく、今回に滞在の得た新しい見地を柱にまとめていく。

研究成果概要:

思想家ではない江藤新平は、自分の著作を残さず、また日記というものも殆どつけなかったことから、いかにして彼の思考形態に近づいていけるかが第一関門であった。当初は、新史料の発掘に恵まれなかったため、先輩方の先行研究からどの程度脱却し新しい見解を創出できるかという道筋を明確に示すことが困難であった。

しかしながら、様々な史料にあたっていくうちに、徐々に江藤新平の思想を物語る関係性が明るみになってきたのである。

まず、佐賀県立図書館、佐賀県本丸歴史館所蔵の江藤家資料である。この殆どは、数十年前に毛利敏彦監修のマイクロフィルムとして市販されており、全国の主要大学図書館等にも保管されているのだが、作成された目録内容が、実はそれに対応すべき各資料内容を必ずしも正確に反映していないことが判明した。裏を返せば、そのような資料は概して研究対象にならず、ある意味では「新史料」というべき価値を持っている。一方、実際図書館や歴史館を訪問した際、未だ目録化されていない貴重史料で、真の意味での新史料に遭遇したことも益した。最後に、受入教員である谷口先生からも示唆に富んだコメントをいただき、方向性が固まってきたのである。

今回、特に明らかになったのは、尊王の志士として佐賀での師である枝吉神陽から国学、律令を学んでいたと同時に兵学や化学の知識獲得を中心に蘭学にも通じるようになっていく思考過程が、実は明治初期の明六社のメンバーのそれと極めて類似しているという点である。無論、明六社員の多くは幕吏出身であったという点は異なるが、倒幕派であった江藤も当時の知識人層における知識のあり方に共通する後に思想回路を持っていたということが言える。蘭語、英語、仏語等に長けていた、将来の明六社員は、ちょうど江藤が新政府の重職にあった時新政府に任用されており、江藤は彼らと何らかの形で繋がり、西洋の制度に対し強烈な知的好奇心を抱くようになる。というのも、江藤家資料には、明六社メンバーである神田孝平、福沢諭吉、中村正直の著作の写しや書き込みのある原稿が残っていること、フランス人法律顧問であるジョルジュ・ブスケと、時には後に明六社員となる箕作麟祥を介して、日常的な面会の機会を持っていることなどが挙げられる。さらに、江藤が佐賀の青年時代にオランダ語を熱心に勉強していたと思われる新史料が発掘された。

ただ、ここで留意すべきは、江藤が洋学に単に傾倒していったということではない。むしろ、伝統的思想体系と洋学とを二者択一で捉えるのではなく、両者を比較し、より優れた制度や思想を導入していくという、一種プラグマティックな態度を持ち得たという点である。そのような特徴は、「洋学者サロン」とややもすると乱暴に形容される明六社のメンバーにも見受けられるのである。儒学の大切さを強調したのは中村正直であった。

国学、儒学、洋学という断定的区別をしてしまうことにより、そのような境界を超えて知識を創出していった、幕末から明治初期にかけての思想的ダイナミズムを捉えることが困難になる。一見すると異なる知の領域であるが、その囲いを外し交流させていくことに重要性を見出した知識層が知の革命を担うことになった、と私は考える。江藤新平において興味深い点は、知の交流を重要視する知識人であった側面と、国を想う志士的政治家という側面の、二面を兼ね備えていたという点である。「人民の権利」という表現は、そのようなダイナミズムの延長線上で現れ、自由民権運動へと発展していく一つの契機になったのではないだろうか。

展望：

短期的には、日本の学会（法史学研究会）に向けて、以上の史料分析から導き出された成果をまとめて、投稿する。その前に、リスボンで開催されるヨーロッパ研究学会において、9月1日にこの研究成果を報告する。中期的には、当初からの江藤新平に関する出版プロジェクトを、今回の滞在研究の収穫を生かした形で実施するため、執筆活動に引き続き従事していく。その上で、谷口教授の知己を得たことから、同様の観点からの共同プロジェクトの申請を検討している。江藤新平の知のあり方が端的に示すように、知の交流をテーマに共同研究を推進していく予定である。最後に、博報財団フランス人フェロー間で共同プロジェクトを立案し、縦の絆を強化していこうと思う。